〔高麗・朝鮮時代の絵画と工芸展によせて〕

水月観音の図様について

高麗仏画の中で最も遺存作例の多い画題である楊柳観音図は水月観音図とも称されますが、観音は水に面した岩座に片足を踏み下ろした半跏で坐し、くつろいだ姿勢をとることが特徴といえます。また、傍らに柳の枝を挿した水瓶または水盤が置かれ、多くの場合、観音の視線の先に善財童子が観音に向かって合掌する姿が描かれます。善財童子が観音を拝する場面は『華厳経』「入法界品」を典拠としており、自然風景の中に描かれた様子は観音の聖地である補陀落山にいる観音像をあらわしていると解釈されてきました。

大和文華館所蔵「楊柳観音図」も岩座に半跏で坐していますが、観音は正面を向き、上半身には紐状の条帛と透けるヴェール、瓔珞しか身につけず、高麗の水月観音図の中では特種です。本稿では、「水月観音」の画題について大徳寺蔵「水月観音図」と中国甘粛省の石窟、東千仏洞の壁画から考察を行い、図像の関連を探ります。

水月観音の図様は中国唐時代の画家周昉によって創始され（『歴代名畫記』）、唐時代末期に新羅からの人々が周昉の画を持ち帰った（『唐朝名画録』）際に朝鮮半島に伝えられた可能性が考えられています。中国に周昉の描いた水月観音図は現存しませんが、五代からの作例が敦煌周辺に残存しており、流行した水月観音像が敦煌まで伝わったと考えられます。水月観音像を考える際に最も基本となるのは、『歴代名畫記』の記載で、そこからは水月観音図に円光と竹が着彩で描かれていたことがわかりますが、その他に具体的な特徴は記されていません。しかし「妙創水月之體」（水月観音の図様が創られた）とも記されているために、それまでに見られなかった図様の観音像であったと考えられ、上述した観音の姿勢や竹といったモチーフの他に水月観音の意義を山水画の中に描かれた観音図とする論考が今までになされています。

大徳寺蔵「楊柳（水月）観音図」（図1）は高麗時代、14世紀初めの作と考えられ、細やかな描写によって観音の穏やかな眼差しや頭上から被る透けるほど薄いヴェールが表現されています。観音は向かって左下の方向へと頭部を傾け、体部も斜め向きの方向から見た姿で描かれています。このような観音の姿勢や竹、岩座、傍らに置かれた楊柳を挿した水瓶、善財童子などのモチーフは他の作例にも共通して見られる要素ですが、通常、観音に相対して描かれる善財童子が、本図では画面右下に描かれ、代わって観音の視線の先には雲上を歩いて観音の方へ向かう人々があらわされています（図2）。本図とよく似た構図を取るものにメトロポリタン美術館蔵本があり両者の関連性が指摘されていますが、現存する他の高麗時代の水月観音図にはこのような人々は描かれず、特異な図像といえます。このような描写から読み取れることを見ていきます。

大徳寺蔵本では、画面下中央やや右よりから弧を描くように人々が連なって画面に動きを与えると共に、その曲線は観音のくつろいだ姿勢を示す身体の曲線へとつながり、画面下から上方へと逆「S」字に視線を導くように構図がまとめられています。人々は観音に較べてかなり小さく描かれ、比率の差によって観音の神性や威厳、さらに人々と観音の間の絶対的な距離感をあらわしているように見られます。この一群は柄香炉や宝物を入れた盤などをそれぞれ持つ貴族と見られる服装の男女六人、その後に幡や宝珠の入った壺などを持つ異形の者六人が続く実に興味深い構成をとります。中心的な人物は先頭の男性と見られ、戴冠し、ゆったりとした官服をまとって観音を参詣する姿は威厳さえ感じさせます。それに対して後方の異形は肌の色や顔つきを人々とは明確に描き分け、最後尾には全身が鱗で覆われ、尾のある姿が描かれています。

これまで本図に描かれた人物群は、『三国遺事』に記された観音の住む補陀落山に見立てられた朝鮮半島の洛山において“義湘法師（三国時代の高僧）が天龍八部に従って念珠を給わり、東海の龍王が如意宝珠を献じて義湘がこれを差し出し観音の真容を見る”という説話にその典拠が求められてきました。しかし人物群の中に僧は見られず、本説話の中心的な人物である義湘はあらわされていません。

ここで、水月観音図の初期の作例が集中する敦煌周辺の石窟壁画中に同様な人物群表現はないか探すと、東千仏洞第二窟の水月観音図中に、雲にのり観音に参詣する貴族と見られる人物と異形のものが認められます（図3、4）。大徳寺蔵本と同様、岩座に半跏に坐す観音の視線の先に、人物群（図4）が描かれています。観音は片足を立膝にして片腕をのせ、もう一方の腕は真直ぐ身体の脇に下ろして手をついている点で大徳寺本とは異なりますが、斜向きの姿で描かれていることや、傍らの小さな岩上に楊柳を挿した水瓶をガラスの器に入れている点、岩が頭上にまで伸びて洞窟の中のような表現、観音の背後から竹が描かれるなど、多々共通点が挙げられます。

次に人物群の表現を見ていくと、香炉を持った貴族風の男性を中心に、女性や幡を掲げた異形が描かれています。人数は四人と少ないものの、香炉を持つ男性は堂々とした風情で、横向きに立つ姿は大徳寺蔵本の先頭に描かれた人物を反転させたかのようです。傍らに宝物をのせた盤を持って配された女性も類似し、俗人の男女とそれに数を合わせた異形という要素が共通しています。大徳寺蔵本は縦長の構図で上方に向かう動きを重視した構図をとり、一群のの雲にスピード感が感じられるのに対して、東千仏洞の作例では広々とした空間が描かれ、人物群のの雲は丸みを帯びた描写で早さを感じさせない、という表現上の違いは認められます。しかし本壁画と大徳寺蔵の水月観音図を比較すると、主要な要素がよく類似し、人物群の図様には共通の典拠の存在が考えられます。その為、高麗時代に制作された図1の人物群も朝鮮半島を舞台とした『三国遺事』の内容になぞらえているとしても、図像上の源流は他に求められそうです。今のところ明確な想定はできていませんが、大仏頂曼陀羅（図5）の下部に描かれた雲上の人物像は大変興味深い図像です。雲上には官服の男性が海に突き出た岩上の尊像を拝しており、その背後に異形や従者、多頭の龍が描かれています。本作は風景画のような空間表現も見られ、晩唐時代に創案された図像をもとに日本で制作されたと考えられており、男性は龍を伴うことからも龍神と解釈されています。本図は、図2、4に見られる人物群と龍王の関連を改めて示すとともにこのような図様が中国中原を介している可能性を持たせ、中国中原から敦煌地域、朝鮮半島に広まった水月観音図像を図様によって結び付ける重要な要素となると考えています。

（瀧朝子）

図1 楊柳（水月）観音図 大徳寺蔵 高麗時代

図2 図1の部分図

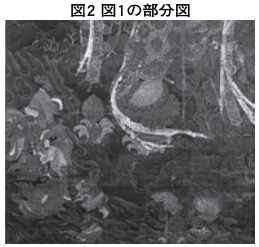

図3 水月観音図（部分図）東千仏洞 西夏時代

図4 水月観音図（部分図）東千仏洞 西夏時代

図5 大仏頂曼陀羅（部分図）奈良国立博物館蔵 平安時代

季刊 美のたより №144
平成15年10月11日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.